airiti

論村上春樹〈沒有女人的男人們〉中男性人物間的情誼

王嘉臨
淡江大學日本語文學系助理教授

摘要

《沒有女人的男人們》為村上春樹於 2014 年所出版短篇小說集。村上春樹在自序中寫著，本作品是描寫由於各種各樣的原因被女性離棄的男人們或即將被離棄的男人們。由於作者的這樣敘述，先行研究中都聚焦在論及村上文學的「喪失感」等。

不同於以往的評論角度，本文旨在透過話語結構深入文本內涵。其中尤以〈沒有女人的男人們〉這篇作品為中心，重新探討其中所展現的意涵和敘事技巧。考察結果得知:1.本作品透過非線性的敘事技巧，刻意壓制敘事過程裡的情節連貫性，巧妙地呈現出主角的個人主觀心境，開啟另類敘述風格。2.透過與他者關係的描寫，對一個人能否完全理解另外一個人表示出懷疑，提出了建立在「異質性」上的連帶關係。

關鍵詞: 〈沒有女人的男人們〉　話語結構　非線性　他者關係　異質性

airiti

Haruki Murakami "The Man Without a Woman": Focusing on the relationship of men

Wang, Chia-lin
Assistant Professor, Tamkang University, Taiwan

Abstract

"Men without Women" published for the Murakami Haruki in 2014 published short stories. Has been the first study are focused on the "sense of loss" and so on. Different from the previous comments, this thesis aims to explore the meaning of text through discourse structure. This article focuses on the works of ‘Men without Women’, and discusses the meaning and narrative skills.

The results show that: 1. through the non-linear narrative techniques, the author deliberately suppressed the plot coherence in the narrative process, skillfully presented the protagonist's subjective state of mind, opened the alternative narrative style. 2. through the description of the relationship with the other, it is possible for a person to fully understand another person's doubt, and put forward the joint relationship based on "heterogeneity".

Key Words: ‘Men without Women’, Narrative skills, Non linearity, Other relation, Heterogeneity

airiti

村上春樹「女のいない男たち」論
―男たちの関係性をめぐって―

王嘉臨
淡江大学日本語文学科助理教授

要旨

「女のいない男たち」は「村上の小説技巧が光を放っている」 と評価されるにもかかわらず、実際にこれまでの研究史を調べてみると、言及はほとんど外面的なレベルにとどまり、作品の内部に踏み込んでその内実を明らかにしたものは皆無に近い。以上のような基本的視点および現状認識をふまえ、本稿は従来のアプローチとは異なり、作品構成システム自体を明らかにした上で作品のモチーフの解析に取り掛かる。

考察の結果、モノローグや感覚の喚起に終始しているテクストの構造は、近代の小説が目指した客観への方向とは逆に、むしろ主観の側に寄り添い、その感覚と関連して緻密に構成されていることが明らかになった。また、「女のいない男たち」では、お互いのことをお互いに同じように理解できているのではなく、むしろそのように出来ないこと、相互に超えがたい溝の存在を知ることがむしろ「理解する」ことになるという逆説が提示され、新たな関係可能性を示唆している。

キーワード:「女のいない男たち」、構造分析、断片的語り、
他者関係、異質性

airiti

村上春樹「女のいない男たち」論
―男たちの関係性をめぐって―

王嘉臨
淡江大学日本語文学科助理教授

1. はじめに

『女のいない男たち』は、二〇一四年に発表された村上春樹の短編集である。この短編集について、斎藤環は「切れ味のいい六つの短編」と評価しながら、「どの作品も甲乙付けがたい。ポップスのLPに例えれば、どれも「A面の一曲目」みたいだ。欲を言えば、時々村上文体のセルフパロディに見えることがあるが、それは仕方がないことだ。六つの連作―そう呼んで良いだろう―に共通するテーマは、強いて言えば「性愛の不条理」だ」と述べ、この短編集を位置づけることの難しさを指摘している[1]。

『女のいない男たち』のモチーフについて、作者・村上春樹は「まえがき」において次のように述べている。

> 本書のモチーフはタイトルどおり「女のいない男たち」だ。最初の一作（『ドライブ・マイ・カー』）を書いているあいだから、この言葉は僕の頭になぜかひっかかっていた。（中略）しかし本書の場合はより即物的に、文字通り「女のいない男たち」なのだ。いろんな事情で女性に去られてしまった男たち、あるいは去られようとしている男たち[2]。

こうした作者の発言により、『女のいない男たち』に言及した評論の多くは、この作品から女のいない男たちの心境に関する部分を抽出し、それに他の村上作品との関連性を考察する傾向が少なから

[1] 斎藤環(2014)「性愛の内と外」『文學界』第68巻6号、P236
[2] 村上春樹（2014)「まえがき」『女のいない男たち』文藝春秋、P7

airiti

ずあった[3]。だが、本作は、＜女性の裏切り＞が一方的に描かれているわけではない。これに関連する人間関係における相互の絶対的な相違への認識も描かれているのである。例えば、巻頭に収められた「ドライブ・マイ・カー」では、夫婦関係を軸に現代人の他者は理解できるというその前提が理解を不可能にしている関係性の問題が描かれ、また表題作「女のいない男たち」では、相互に超えがたい溝があることを知ることがむしろそれも「理解する」ことになるという逆説が提示されている。こうしたことは、村上春樹が男女関係を描く中で到達した認識と考えられる。したがって、＜女性の裏切り＞に単純に回収することは、この関係性の問題を見過ごすことになる。

以上のことを踏まえて、本稿では作品外の要因を作品の部分部分に当て嵌めて読み解く従来のパターンに固執せず、まず作品構成システム自体を明らかにした上で解析に取り掛かろうと思う。中でもこの短編集の巻末に収録された「女のいない男たち」という作品を取り上げる。

「女のいない男たち」は「村上の小説技巧が光を放っている」[4]と評価されるにもかかわらず、実際にこれまでの研究史を調べてみると、言及はほとんど外面的なレベルにとどまっていて、作品の内部

---

[3] 例えば、都甲幸治(2014)は「妻はなぜ裏切るのか。『女のいない男たち』はその疑問を巡って書かれている。そしてその問いが、これまでの作品ではなかった形で明瞭に深化されていると言える。思えば、今までの村上作品においても、本質的には同じ問いが繰り返されていたのではないか」と指摘する（「妻の裏切り」『文學界』第 68 巻 6 号、P239)。また、清水良典(2014)も、「思えば『ノルウェイの森』以来『国境の南、太陽の西』『スプートニクの恋人』のように、村上春樹はたびたび、セックスが深く深刻なトラウマの契機となる物語を書き続けてきた。（中略）村上春樹の小説世界において、セックスとは愛の結実の行為であるばかりではなく、魂の地下の蓋を開けてしまうような、人間存在を脅かす底なしの力を秘めた領域なのである。たとえば男がその闇の力に触れてしまったら、もはや無邪気な愛に二度と戻ることのできない「女のいない男たち」になるのだ」と述べている（「その奥に秘められし力を見出すべし」『文學界』第 68 巻 6 号、P235)。

[4] 村上春樹を読み解く会(2017)『短篇で読み解く村上春樹』マガジンランド、P92

airiti

に踏み込んでその内実を明らかにしたものは皆無に近い。したがって、この作品について議論の余地は十分にあると思われる。以下、関係性を中心的なモチーフとするとともに、表題作「女のいない男たち」の検討から、考察を始めることにしたい。

2. 語りのあり方について

「女のいない男たち」は過去の恋人「エム」の死を告げる「エム」の夫の電話を描く段で始まっている。一人称の語り手「僕」が「エム」の死を契機に、自殺した女性「エム」への思いを巡らす。

> 僕は実を言うと、エムのことを、十四歳のときに出会った女性だと考えている。実際にはそうじゃないのだけれど、少なくともここではそのように仮定したい。（中略）僕らはそんな具合に、中学校の教室で初めて出会ったのだと。アンモナイトだかシーラカンスだか、その手のものにひそやかに圧倒的に仲介されて。そう考えると、いろんなことがとてもすんなりと腑に落ちるものだから（P269、下線部は筆者により、以下同）。

語り手「僕」が「エム」を「十四歳のときに出会った女性」と語りはじめる。が、次の瞬間「実際にはそうじゃないのだけれど、少なくともここではそのように仮定したい。」と「僕」の語りが一つの解釈に収斂していくのではなく、曖昧さを生成していく。そして、作品中に多用されている「でも」という逆接接続詞は、こうした曖昧さを生成していく語り方をいっそう深化させているのである。

> 自分がここでいったい何を言おうとしているのか、僕自身にもよくわからない。僕はたぶん事実ではない本質を書こうとしているのだろう。でも事実ではない本質を書くのは、月の裏側で誰かと待ち合わせをするようなものだ。真っ暗で、目印もない。おまけに広すぎる。僕が言いたいのは、とにかくエムは僕

airiti

が十四歳のときに恋に落ちるべき女性であったということだ。でも僕が実際に彼女と恋に落ちたのはずっとあとのことで、そのときには彼女は（残念ながら）もう十四歳ではなかった。僕らは出会いの時期を間違えたのだ。待ち合わせの日にちを間違えるみたいに。時刻と場所は合っている。でも日にちが違う（P272）。

文中に「でも」という接続詞が合計十六回使われる。約二万字の短編作品においてはかなりの頻度であり、目立つ言葉である。上記に引用した場面を詳しく見てみよう。このシーンでは、語り手「僕」は自分が書こうとしたものを「たぶん事実ではない本質」と説明し、意味づける。が、次の瞬間、「でも事実ではない本質を書くのは、月の裏側で誰かと待ち合わせをするようなものだ。真っ暗で、目印もない。おまけに広すぎる」と前の意味づけがはぐらかされ、相対化されてしまう。つまり、「でも…」「…ではない」を重ねることで、語りが続けば続くほど確たる意味をぼかし、かえって曖昧性を生成、増大させていくのである。

一般的にいって、近代の日本の小説においては、作中世界の時間軸や事件を、ひとつの解釈に向かって緊密に配置、構成することで、出来事の前後関係、因果関係に明確な輪郭を与えることが要求されている。言わば、作品を通じて、あたかも客観的な一つの世界とその中で生きる人物の時空が作品の読み手に投射されるような構造である。しかし、この作品では「でも…」「…ではない」を重ねることによって、一義的な意味や目的へと統合・収斂することのない流動的な連鎖性が示されている。では、このような曖昧な語り方は、単なる語りの矛盾といった語りの審級の問題に留まるだろうか。以下、この点を作品のモチーフとの関連を見ながら考察したい。

3.　心情を表出する装置

まず、注目しておきたいのは「女のいない男たち」において、語

airiti

り手「僕」が、出来事を報告し、展開するというよりも、これら回想される出来事への感覚あるいは情景を象徴的に描き出そうとしていることである。例えば、「エム」との過去について、「僕」は次のように語る。

> 僕らは十四歳のときに中学校の教室で出会った。たしか「生物」の授業だった。アンモナイトだか、シーラカンスだか、なにしろそんな話だ。彼女は僕の隣の席に座っていた。僕が「消しゴムを忘れたんだけど、余分があったら貸してくれないか」と言うと、彼女は自分の消しゴムを二つに割って、ひとつを僕にくれた。にっこりとして。そして僕は文字通り一瞬にして彼女と恋に落ちた。彼女はそれまでに目にした中で、いちばん美しい女の子だった。とにかくそのとき僕はそう思った。（中略）僕は十四歳で、作りたての何かのように健康で、もちろん温かい西風が吹くたびに勃起していた。なにしろそういう年齢なのだ。でも彼女は僕を勃起させたりしなかった。彼女はすべての西風をあっさり凌駕していたからだ（P269～270）。

語り手「僕」が出来事の報告というよりはむしろ、「彼女はすべての西風をあっさり凌駕していたからだ」、「そんな気持ちにさせてくれる女の子に出会ったのは、生まれて初めてのことだった。僕はそれがエムとの最初の出会いだったと感じている」と「西風」を引き合いにしつつ、情景あるいは感覚を象徴的に描き出す。つまり、「エム」との関係をめぐる「僕」の回想は過去の直線的な時間の流れに沿って遡及していくのではなく、その当時に彼が経験した感覚の記憶と分かちがたく結びついている。とすれば、前述した曖昧な語り方は固定的な意味付けを抑え、情緒を際立たせる方法と考えられるのではないか。

このような語り手「僕」が出来事や登場人物の言葉を客観として報告し、展開するというよりも、モノローグや感覚の喚起に終始し、

airiti

心情を前面に出している表現のあり方は、作品中に端的に現れている。例えば、「エム」との関係性を語る場面で、「僕」は次のように言う。

> 彼女が去り、どれほど僕がその時に懊悩したか、どれほど深い淵に沈んだか、きっと誰にもわからないだろう。いや、わかるわけはない。僕自身にだってよく思い出せないくらいなのだから。どれほど僕は苦しんだのか？どれほど僕は胸を痛めたのか？哀しみを簡単に正確に計測できる機械がこの世界にあるといいのだけれど。そうすれば数字にしてあとに残しておけたのだ。その機械が手のひらに載るほどの大きさのものであればいうことない。僕はタイヤの空気圧を測るたびに、そんなことを考えてしまう(P273～274)。

「エム」との関係性に甘美、幸福感を感じた一方で、常に失望も経験する。「僕は消しゴムの半分をビニール袋に入れ、いつも大事に持ち歩いていた。まるで何かの護符のように(P271)」と「彼女」との関係を安定状態にするという「僕」のロジックは、「彼女はいろんな場所に含まれ、いろんな時間に含まれ、いろんな人に含まれている(P271)」という複数の男との関係を求める「彼女」のロジックと拮抗する。こうした「エム」とのずれにより、「僕」は深い失望を味わった。そして、「彼女は水夫の世慣れた甘言に騙され、大きな船に乗せられ、遠いところに連れて行かれただけなのだ。彼女は常に何かを信じようとする人だったから。新しい消しゴムを戸惑いもなく二つに割って、その半分を差し出す人だったから(P271)」と「水夫」の出現により、「僕」と「エム」との恋愛が破局となったと認識している。恋人を奪われた「僕」は、ここで一連のモノローグを通して、当時の心情を吐露し、表白する。ここでも、語り手「僕」は出来事の展開を報告するよりも、モノローグや感覚の喚起に終始し、その当時の事情ではなく、心情を前面に出している。

airiti

以上のように、「女のいない男たち」の語りは、シークエンスを備えた物語、すなわち始まりと展開部と終りを有するまとまった出来事の報告は断片的で、いわゆる物語をなしているわけではない。むしろ象徴的に「エム」の経緯が語られることに伴って、それをモノローグや心情の描出によって構成しようとしている。こうした情緒を表することに重点をおいた構造のあり方は、短編集『女のいない男たち』の執筆背景と無縁ではないであろう。例えば『女のいない男たち』の執筆背景について、作者村上は次のように述べている。

> どうしてそんなモチーフに僕の創作意識が絡め取られてしまったのか（絡め取られたというのがまさにぴったりの表現だ）、僕自身にもその理由はよくわからない。そういう具体的な出来事が最近、自分の身に実際に起こったわけではないし（ありがたいことに）、身近にそんな実例を目にしたというわけでもない。ただそういう男たちの姿や心情を、どうしてもいくつかの異なった物語のかたちにパラフレーズし、敷衍してみたかったのだ[5]。

このような執筆の背景を下地にして、村上がこの短編集に取り組む時、言語を手段として、直接には表現しにくい「心情」を表することに重点が置かれているのは明らかである。その意味で、出来事の報告が断片的で、モノローグや感覚の喚起に終始しているテクストの構造は、物語内容として、心情の表出を中心に、近代の小説が目指した客観への方向とは逆に、むしろ主観の側に寄り添い、その感覚と関連して緻密に構成されているのである。

4. 「女のいない男たち」の絆

以上のように、「女のいない男たち」では曖昧な語り方、そして

[5] 村上春樹（2014）「まえがき」『女のいない男たち』文藝春秋、P7~8

airiti

感覚の喚起に終始しているという表現の特性によって情緒的な過去の体験の再現描写が形成され、「エム」を失った「僕」の心境が形象化されていく。その一方で「僕」は「エム」との関係性を語る中で、人間関係における相互の絶対的な相違への認識という問題も呼び起こしている。以下、この点についてみていきたい。

前述したように、「女のいない男たち」では「エム」の夫の電話によって昔付き合っていた彼女「エム」との過去が喚起される。そして重要なのは、物語の進行とともに当初「エムがどういう女性だったのか、僕らがいつどこで知り合って、どんなことをしたのか、それについて具体的に語ることはできない。(中略) だから僕としては、僕はかなり以前に彼女と一時期、とても親密につきあっていたが、あるときわけがあって離ればなれになった、としかここでは書けない(P269)」という動機で始まった「僕」と「エム」の話は、「僕」「エム」「水夫」という三者関係の次元の問題を超えて、「女のいる男」「女のいない男」といった一般的関係性の次元に拡がり、やがて「それでもやはり僕は彼に同情する(P275)」という「エム」の夫への同化による結びの叙述に至ることになる。以下、物語内容に立ち入ってこのことについて論じてみたい。

十四歳のときに消しゴムの分け合いによって、「僕」は「一瞬にして彼女と恋に落ちた。彼女は僕がそれまでに目にした中で、いちばん美しい女の子だった(P269)」と「エム」に愛着をよせている。さらに、彼女に対して性欲を感じ、「僕」は「エム」に対する愛を意識するようになる。しかし、安定した関係性を好まない自由奔放な「エム」とのずれにより、「僕」は常に失望を経験する。こうした相互の認識の差異、対立が作中で繰返し提示される。

> セックスをするときもそうだった。そこにはいつもエレベーター音楽が流れていた。僕は彼女を抱きながら、いったい何度パーシー・フェイスの『夏の日の恋』を聴いたことだろう。こんなことを打ち明けるのは恥ずかしいが、今でも僕はその曲を

airiti

聴くと、性的に昂揚する。息づかいが少し荒くなり、顔が火照る。パーシー・フェイスの『夏の日の恋』のイントロを聴きながら性的に昂揚する男なんて、世界中探してもたぶん僕くらいだろう(P282)。

「エム」との肉体関係、つまり身体を重ねることによって、強い親密性が生まれる。二人が共有する性愛の記憶と快楽が描き出され、二人の親密性、一体感が鮮やかに象徴されていた。しかし、性交がもたらす幸福感は一時的なもので、「僕」は再度「エム」の裏切りを経験する。「でももちろん僕が再び彼女を失う時はやってきた。（中略）彼女が去り、どれほど僕がその時に懊悩したか、どれほど深い淵に沈んだか、きっと誰にもわからないだろう。いや、わかるわけはない。僕自身にだってよく思い出せないくらいなのだから(P273)」と「エム」の裏切りにより、性愛がもたらす親密性、一体感はむしろ闇に沈むほどの衝撃となり、所詮幻想に過ぎなかったという現実が突き付けられ、「僕」は深い絶望に陥った。そして、「哀しみを簡単に正確に計測できる機械がこの世界にあるといいのだけれど。そうすれば数字にしてあとに残しておけたのだ。その機械が手のひらに載るほどの大きさのものであればいうことない(P273～274)」と比喩の表現でしか意味づけられない強烈な打撃を受けた身体感覚、痛みと哀しみには、その苦しみの深さが象徴化されている。

ところで作品の中盤から物語は「僕」と「エム」との個人的関係性といった次元を超えて、「女のいる男」「女のいない男」といった一般的な関係性の次元の問題に拡がる。

女のいない男たちになるのはとても簡単なことだ。一人の女性を深く愛し、それから彼女がどこかに去ってしまえばいいのだ。ほとんどの場合（ご存じのように）、彼女を連れて行ってしまうのは奸智に長けた水夫たちだ。彼らは言葉巧みに女たちを誘い、マルセイユだか象牙海岸だかに手早く連れ去る。それ

airiti

に対して僕らにはほとんどなすすべはない。あるいは水夫たちと関わりなく、彼女たちは自分の命を絶つかもしれない。それについても、僕らにはほとんどなすすべはない。水夫たちにさえなすすべはない（P279)。

ここで「僕」と「エム」と「水夫」の個人的関係での問題が「女のいない男たち」(「僕ら」）/「水夫たち」(「彼ら」）という一般化された次元の問題へと接続され、展開されていく。つまり、「水夫」は単に「僕」と「エム」の関係に介入する自分の個人的な恋敵というだけではなく、男女の一般的な関係性における「女のいる男」の象徴、親密な関係にある男女から女性を奪い取る異性愛関係のライバルとして立ち現れるのである。「水夫たち」(「彼ら」）は「奸智に長け(P279)」、「言葉巧み(P279)」と女扱いがうまく、逞しく行動力のある、女性の視線を集める性的魅力に満ちている危険な男であるように、異性愛関係のライバルとして類型化される。そして、「僕ら」と「彼ら」の関係は＜女のいる男/女のいない男＞といった二項対立的な構図に振り分けられる。

こうした振り分けにより、当初他者として捉えられた「エム」の夫は、自分と同じような境遇の存在、つまり「水夫」に伴侶を奪われた「女のいない男たち」として同一視されていく。

そして彼女の死と共に、僕は十四歳のときの僕自身を永遠に失ってしまったような気がする。（中略）アンモナイトとシーラカンスがそれを寡黙に見守っている。素敵な西風ももうすっかり止んでしまった。世界中の水夫たちが彼女の死を心から悼んでいる。そして世界中の反水夫たちもまた。

エムの死を知らされたとき、僕は自分を世界で二番目に孤独な男だと感じることになる。

世界でいちばん孤独な男は、やはり彼女の夫に違いない。僕はその席を彼のために残しておく。僕は彼がどんな人物なのか

airiti

知らない。年齢はいくつなのか、何をしているのか、していないのか、まったく情報を持たない。僕が彼に関して知っているのはただひとつ、声が低いということだけだ。でも声の低いことは、僕に彼についての具体的な事実を何も教えてはくれない。彼は水夫なのだろうか？それとも水夫に対抗するものなのだろうか？もし後者であるとすれば、彼は僕の同胞の一人ということになる。もし前者であるとすれば……それでもやはり僕は彼に同情する。彼のために何かができればいいのだが、と思う(P274～275)。

作品の前半で、「僕」は「問題は彼が僕に何ひとつ説明を与えてくれなかったことだ。彼は妻が自殺したことを僕に知らせなくてはならないと考えた。(中略) 僕を知と無知の中間地点に据えること、それがどうやら彼の意図するところであるらしかった。どうしてだろう？僕に何かを考えさせるためだろうか？(P266)」と述べている。つまり、本来平行関係にあって関わるはずがない「僕」と「エム」と「彼女の夫」は、「エム」の死を知らせる「彼女の夫」の電話によって結びつけられ、接続された。その意味で、「僕」にとって「エム」の夫は、これまでの心の調和を乱し、「エム」に関わる「僕」のトラウマを呼び起こす撹乱者と言う事が出来るだろう。

しかし、「僕」の思いが個人的関係を超えて＜女のいる男/女のいない男＞といった振り分けに到った結果、「エム」の夫は自分と同じ立場の存在として共感を持ちえる存在に転じた。上記の引用からは、語り手「僕」は自分を否定する敵対者・「水夫たち」を批判するとともに、「エム」の夫を自分の同類、「女のいない男たち」であることをも見出したことが窺える。「エム」の夫を身近に感じ出した「僕」は、たとえ「エム」の夫が「水夫」であっても、「それでもやはり僕は彼に同情する」と屈折した心境を吐露するに至った。

では、この作品が最終的に辿り着いた「女のいない男たちになるのがどれくらい切ないことなのか、心痛むことなのか、それは女の

airiti

いない男たちにしか理解できない(P276)」といった「女のいない男たち」の絆は、単なる女性を媒介とする男性同士の絆、結束と理解してよいだろうか。以下、少々細部に渡ってこの点について考察していきたい。

> でも僕がそのかつての彼女の夫に近づくすべはない。彼の名前も知らないし、住んでいる場所も知らない。あるいは彼は既に、名前も場所もなくしてしまっているかもしれない。なにしろ彼は世界でいちばん孤独な男なのだから。（中略）世界で二番目の孤独と、世界でいちばんの孤独との間には深い溝がある。たぶん。深いだけではなく、幅もおそろしく広い（P275）。

女を失う気持ちは単なる個人の痛みに限らず、「エム」の夫といった見知らぬ人たちとの連帯感にまで及び、空間的に拡がっていく。その一方で、「世界でいちばんの孤独」である「エム」の夫と「世界で二番目の孤独」である自分との間には超えがたい大きな断層をも感じている。つまり、互いを知り合うには努力では超えられない絶対的な限界があることが提示されているのである。しかし、それは同時に、そうした乗り越えられない断層を認識したからこそ、逆に「エム」の夫との連帯をも可能にする絆が生まれたとも言えよう。

しかし、一般的にいって、私たちは他者を理解するというと、このようなずれをあってはならない、望ましくないものと考えてしまう。ずれがあることも理解していないし、それが超えがたい相違であることも認識できず、まだ努力が足りず、解りあっていないのだと考えてしまう。そこでは、努力すれば自己と他者は一体化できるという思い込みが前提になっている。しかし、この作品はむしろずれがあること、超えがたい相違の存在を知ることが、実は他者との絆をもたらす、本質的な理解の仕方であることを提示しているのである。このように、「女のいない男たち」という女を喪失した男の孤独をめぐる物語は、孤独であるがゆえに生じるより本質的な関係性

airiti

の問題を俎上にのせようとした物語だと言えよう。

5. おわりに

「まえがき」に書かれた作者自身の言葉から分かるように、『女のいない男たち』は「女を喪失した男たち」の物語である。夫婦、恋人、別れた恋人、友人など様々な男女の緊密な関係性を通して、『女のいない男たち』は、女を喪失した男の心理を鮮やかに描いた。この短編集の最後に置かれた「女のいない男たち」も、基本的に「エム」との苦い関係、つまり女の裏切りによって生じた「僕」の絶望をめぐって展開していくことになる。そして、本稿で行ったテクストの構造分析において明らかになったことは、この作品が明らかにこれらの一連の物語の枠を超えているものであるということである。そこには、「エム」とのあまりにも苦い経験を語る中で、「女のいない男たち」の絆が語られると同時に、超えがたいずれが存在することが認識され、そうした関係性として結びついている断絶を踏まえた緩やかな繋がり、新たな関係性の可能性が示唆されている。

そして、こうした相互の絶対的な相違への認識によって生まれる緩やかな繋がりのモチーフはこの作品に限らず、この短編集の中で繰返し追究されている。例えば、巻頭に収められた「ドライブ・マイ・カー」では、「家福」と妻との関係性に関して次のように書かれている。

> どうして彼女が他の男たちと寝なくてはならないのか、家福にはよく理解できなかった。そして今でも理解できていない。二人は結婚して以来、夫婦としてまた生活のパートナーとして、良好な関係を常に保っていたからだ。暇があればいろんなことを熱心に正直に語り合ったし、お互いを信頼しようと努めてきた。自分たちは精神的にも性的にも相性が良いと、彼は思っていた。周りの人々も彼らを仲の良い理想的なカップルとして見ていた（P31）。

airiti

「家福」と妻はお互いのことを了解しあうために、「暇があればいろんなことを熱心に正直に語り合ったし、お互いを信頼しようと努めてきた」と、何でも話し合い緊密な関係性を保ってきた。しかし、実は、そうした形では相互の存在を理解することはできなかったのである。それは次の「高槻」の言説によって明らかにされる。

> でもどれだけ理解し合っているはずの相手であれ、どれだけ愛している相手であれ、他人の心をそっくり覗き込むなんて、それはできない相談です。そんなことを求めても、自分がつらくなるだけです(P54)。

ここで「高槻」は相互の心の伝達の不可能性を示し、「家福」が可能だと信じて疑わない、実は現実の妻との関係では完全に破綻していた「誰かのことをすべて理解(P52)」できるという、傲慢を相対化する。結局、夫婦の絆という緊密な関係性においてであっても、「ずれ」が当然あるということが相互に認められない限り、その「ずれ」が最後には二人の関係性を破壊していくのである。「絆」とはいったい何だろう？何でも話し合って努力すれば、人は互いに理解しあうことができるのだろうか？このように、「ドライブ・マイ・カー」では夫婦関係を軸に、現代人の他者は理解できるという、実は、その前提が理解を不可能にしている関係性の問題が描かれ、問い続けられている。しかし、こうした問いへの答えは結局最後まで解明されないまま、「ドライブ・マイ・カー」は終えられている。

そして、「女のいない男たち」は、お互いのことをお互いに同じように理解できているのではなく、むしろそのように出来ないこと、しないこと、相互に超えがたい溝の存在を知ることがむしろ「理解する」ことになるという逆説を提示し、その点で新たな関係の可能性を示唆している。その意味で「女のいない男たち」は表題作の位置を占めるのみならず、村上春樹が男女関係を描く中で、今まで追

airiti

求してきた人間相互の関係可能性の問題に対する到達点を示唆しているものと言えよう。

【テキスト】

村上春樹(2014)『女のいない男たち』文藝春秋

＜付記＞

本稿は、2015 年 12 月日本専修大学で開催された「2015 年度専修大学人文科学研究所第 4 回公開講座」で口頭発表した内容に大幅に加筆し、訂正を行ったものである。

【参考文献】

岩宮恵子(2014)「十四歳という人生の独立器官」『文学界』第 68 巻 6 号

宇佐美毅・千田洋幸編(2008)『村上春樹と一九八〇年代』おうふう

宇佐美毅・千田洋幸編(2012)『村上春樹と一九九〇年代』おうふう

宇佐美毅・千田洋幸編(2016)『村上春樹と二十一世紀』おうふう

大木達也(2015)「『女のいない男たち』「木野」を読む：村上春樹・小説論ノート(1)」『日本語・日本文化研究』第 21 号

河合俊雄（2014）「女のいない男たちのインターフェイスしない関係：村上春樹新作論」『新潮』第 111 巻 7 号

川村湊（2016）「震災後の文学批評」『社会文学』第 44 号

小手川正二郎（2014）「他人を「理解」すること―レヴィナスの理性論序説」『人文』第 12 号、25-39 頁

小林由紀（2015）「『女のいない男たち』における『木野』の「両義」性：物語構造連鎖から読み解く」『比較文化研究』第 119 号

向山守（2016）「『女のいない男たち』について」『静岡福祉大学紀要』第 12 号

長谷正人（1996）「遊戯としてのコミュニケーション」大澤真幸編（1996）『21 世紀学問のすすめ 3　社会学のすすめ』筑摩書房

長谷正人・奥村隆編（2009）『コミュニケーションの社会学』有斐閣

airiti

アルマ
米村みゆき編（2014）『村上春樹　表象の圏域―『1Q84』とその周辺』森話社

TAMKANG UNIVERSITY

airiti

※2017 年 4 月 30 日受領　2017 年 6 月 30 日審查通過